

村道4号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

塩ノ井 山ノ神遺跡

2003

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

村道4号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

塩ノ井 山ノ神遺跡

2003

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会



16-3



16-7



16-4



16-5



16-6

1. 1号住居址出土土器
2~6. 1号住居址出土墨書土器

序

本報告書は、塩ノ井山ノ神地籍の村道4号線の拡幅工事にあたり、11月19日（月）より11月22日（木）まで試掘調査、11月26日（月）～12月26日（木）まで本調査を実施した発掘調査です。

工事予定地の付近には天伯遺跡や出頭沢遺跡などがあり、また現地の事前調査で石器を採集できたことから遺跡が埋蔵されていることが予想されました。

このため試掘調査を行い、遺跡の有無の確認を行ったところ、住居跡が確認できましたので本調査に入りました。道路の拡幅分約288m²（4m幅で72m）の発掘でした。

その結果、縄文時代中期中葉末の住居址2軒、及び平安時代前期の住居址1軒を確認することが出来ました。本遺跡はこれまで遺跡分布図に載っていない遺跡で、今回の調査で遺跡であることが明らかとなりました。

3軒の住居址のうち、平安時代の住居址は、農地基盤整備時の影響をあまり受けておらず、当時の食器類や貯蔵具等が良好な状態で出土しました。

調査期間が11月下旬から12月末まででありましたが、12月になると数年ぶりの年内の降雪と厳しくなる寒さで調査は難航しました。私や教育次長も発掘調査に加わりましたが、担当者はじめ作業にかかわった人達の、寒風の中、根気強く、そして手際よく、しかも慎重に掘り進む真摯な姿勢に心うたれた次第であります。ここにあらためてご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

南箕輪村教育委員会

教育長 伊 藤 修

例 言

- 1 本書は長野県上伊那郡南箕輪村683-2他に所在する塩ノ井山ノ神遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は南箕輪村による村道4号線拡幅工事を契機に南箕輪村教育委員会がおこなったものである。
- 3 発掘調査は平成13年11月19日から平成13年12月26日までおこない、引き続き整理作業及び報告書の執筆をおこなった。
- 4 土器の復元は福沢幸一氏にお願いした。
- 5 遺構図は1:60に統一した。
- 6 遺物実測図は1:3、1:4を基準にしているが、小個体の場合に1:2とした。
- 7 調査・整理にあたっての出土遺物及び図版類は南箕輪村教育委員会が保管している。

本文目次

序

例 言

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 自然環境	2
第3節 歴史的環境	2
第2章 調査の経緯	6
第1節 調査の契機と経過	6
調査日誌	6
第2節 調査の体制	9
発掘調査	9
整理作業	9
第3章 遺構と遺物	10
第1節 縄文時代の住居址	10
2号住居址	10
3号住居址	12
第2節 平安時代の住居址	15
1号住居址	15
第3節 その他の遺構	19
土坑1	19
第4章 総 括	20
引用参考文献	
図 版	

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置

塩ノ井山ノ神遺跡は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷北部の天竜川右岸、南箕輪村683番地2他(字山ノ神)に位置している。天竜川により形成された河岸段丘の最上段に位置する遺跡の標高は706mで、遺跡の一带及びその西側は上伊那郡内屈指の水田地帯がひろがっているほか、経ヶ岳をはじめとする木曾山脈を一望することができる。



第1図 遺跡位置図 (1:20,000)

第2節 自然環境

南箕輪村は長野県伊豆郡盆地北部の広く開けた地域、天竜川右岸に位置している。地形的にみると西に位置する木曾山脈経ヶ岳山地群に属する経ヶ岳南東部の飛地を除いては、その麓を扇頂とする扇状地と天竜川により形成された沖積地から成っている。

扇状地は一部天竜川、小沢川の複合扇状地になっているが、ほとんどが大泉川により形成されたものである。山麓から段丘突端部までの幅は最大で約4.5km、標高は700mから900mに及び、東へ約2度のゆるやかな傾斜地となっている。

扇状地扇端部は、難壇状に段丘が形成されている。また、扇状地特有の湧水からなる小河川の浸食により形成された沢が10箇所みられる。

天竜川沿いに続く河岸段丘は最大で標高差約40mを測り、一部には断層の影響を観察できるところがあるため、その地形形成は大泉川や天竜川等の河川の浸食だけではないことが推定される。

自然水系としては西の山地より流れる大泉川・清水川・戸谷川があるが、これらの河川は扇状地扇中央部では伏流し水量が激減するが、扇端部付近で再び湧出する。この他に扇端部の段丘崖を源流とする北沢川・南沢川・滝ノ沢川等の小河川が天竜川に流れ込んでいる。これら小河川の湧水は水量及び水温が比較安定しているので、現在ではそれを利用したワサビ栽培が行われている。この扇端部からの湧水の水量と水質は、昭和3年に扇状地を横切る形で造られた灌漑用水幹線水路である西天竜水路の完成と、それに伴う大規模な開田により変化したといわれる。

沖積地は昭和27年から29年にかけて実施された土地改良事業により大規模な水田地帯となったが、それ以前は天竜川により形成された自然堤防による後背湿地と扇状地扇端部からの湧水により、幾つもの沼が点在する大湿地帯であった。近年この地域は宅地化がすすんでいるほか、国道153号線箕輪バイパスの建設がすすめられている。

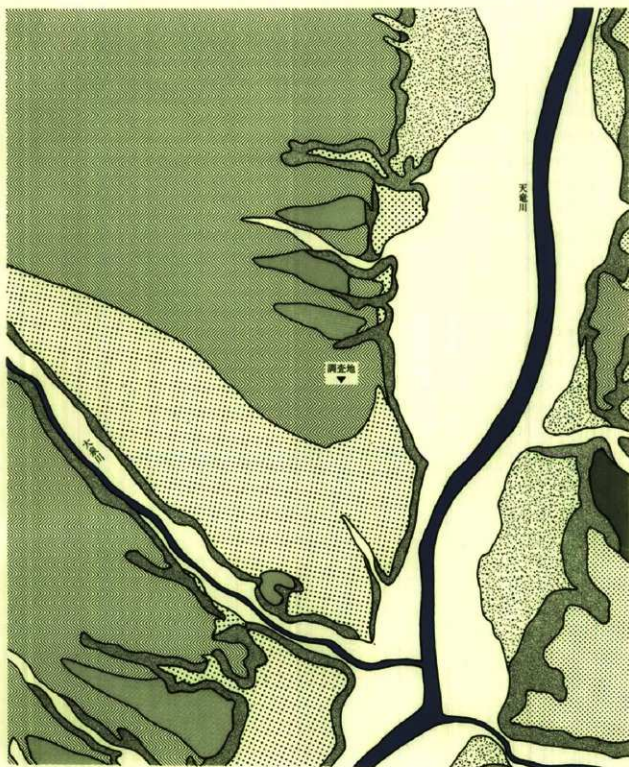
第3節 歴史的環境

南箕輪村には現在確認されている遺跡は50を数えるが、そのほとんどは扇状地を東流する大泉川・清水川・戸谷川の両岸と、扇状地扇端部の天竜川右岸段丘上に位置している。また、天竜川沖積地には北隣の箕輪町から広がる箕輪遺跡がみられる。

これらのなかでも著名なものが「神子柴遺跡」である。神子柴区清水地帯に位置する同遺跡は昭和33年に旧石器時代の遺跡として発見・調査され、神子柴型石器一括（国重要文化財指定）の検出をみた。

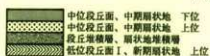
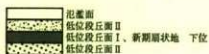
縄文時代では、これまでに天伯遺跡・大芝東遺跡・北高根A遺跡・高根遺跡・南高根遺跡など主に中央自動車道建設に伴う発掘調査により遺構・遺物が確認されている。これらの調査では前期以前の遺構は確認されていないが、神子柴遺跡の第3次調査で押型文土器・茅山式土器の破片が出土している。また、大芝東遺跡・南高根遺跡・北高根A遺跡においても早期末から前期にかけての木鳥式・天神山式等土器片が出土している。

住居址等、集落が想定できる遺構は天伯遺跡・大芝東遺跡・北高根A遺跡で確認されている。これらは前期から中期末にかけてのもので、量的には中期のものが圧倒的に多い。この他に平成7年に調査が実施され



凡 例

1:25,000



第2图 地形・地質区分图

た久保上ノ平遺跡は中期中葉～中葉末にかけての拠点集落であったことが確認され、祭祀的な色合いが強い遺構・遺物が多く出土した。後期のものは現在のところ遺構・遺物ともに確認されていない。

晩期では遺構の検出はないものの、神子柴遺跡・南高根遺跡・久保上ノ平遺跡で土器片が出土している。弥生時代では同時代の遺跡数が少ない上、検出された遺構・遺物も多くはない。天伯遺跡・北高根A遺跡・北垣外遺跡・久保上ノ平遺跡で中期から後期の遺構・遺物が検出されている。久保上ノ平遺跡からは住居址の他に方形周溝墓群が検出された。また、沖積地の箕輪遺跡からは住居址及び水田区画の検出は出来なかったものの、それらの存在をうかがわせる畦畔・水路跡・土器・打製石斧・石鏃等の遺構・遺物が出土している。

古墳時代では、子持勾玉と直刀が出土したと伝えられる丸山古墳が造営されているほか、北垣外遺跡より扁円筒形土製品が出土し、古墳時代屋内祭祀関連の資料の追加をみた。また、天伯遺跡においては、9軒の住居址が検出され、そのなかから脚部を欠いてはいるが須恵器の高坏が出土している。

なお、発掘調査によるものではないが宮ノ上遺跡より初期土師器高台付壺や五鈴鏡など注目すべき遺物が出土している。

奈良・平安時代をみると、集落はさらに村内各河川の河岸段丘周辺を軸にしながる西方の山麓付近にまで広がりをみせるようになる。古代東山道との関連も含め、今後の検討課題の一つである。

また、宮ノ上遺跡からは平安時代、9世紀後半の火葬焼骨が埋葬された石組の墳墓がほぼ完全な形で出土している。焼骨を埋納してあった灰釉陶器短頸壺は完形で出土し、村指定文化財となっている。

中世には天竜川右岸の段丘縁辺にその地形を利用して、棚木城・中込城・倉田城・有賀城・内城などの城館が築かれている。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	地 籍	時 代						備 考
			旧石	縄文	弥生	古墳	平安	中世	
1	塩ノ井山ノ神	塩ノ井		○			○		
2	久保上ノ平	久保		○	○	○	○		平成7年度調査
3	久保下	久保				○			
4	南垣外	久保		○	○				
5	天王原	久保					○		
6	向垣外	塩ノ井		○	○	○	○		
7	箕輪	塩ノ井・久保木下・三日町		○	○	○	○	○	昭和57年～平成6年度調査
8	山の神	中込		○	○				
9	天伯	塩ノ井		○	○	○	○		昭和42年度調査
10	塩ノ井	塩ノ井			○				平成6年度調査
11	内城	北殿		○		○			
12	出頭沢	塩ノ井		○			○		
13	垣外	塩ノ井		○					
14	大泉	大泉			○	○	○		
15	西垣外	北殿		○	○		○		
16	北垣外	北殿			○	○	○		平成2年度調査
17	柴宮	北殿		○					
18	大泉下	南殿		○					
19	秋葉神社	北殿		○	○				
20	宮ノ上	南殿		○		○			平成元年調査
21	羽場	畑田		○					
22	田畑	畑田		○					
23	神子柴	神子柴	○	○			○		昭和33年度・平成10年調査



- ① 堀ノ井山ノ神 ② 久保上ノ平 ③ 久保下 ④ 南堀外 ⑤ 天王原 ⑥ 向堀外 ⑦ 築輪 ⑧ 山の神 ⑨ 天伯 ⑩ 堀ノ井 ⑪ 内城
 ⑫ 出願沢 ⑬ 堀外 ⑭ 西堀外 ⑮ 北堀外 ⑯ 榮宮 ⑰ 大泉下 ⑱ 秋葉神社 ⑲ 宮ノ上 ⑳ 羽場 ㉑ 田畑 ㉒ 神子集

第3図 周辺遺跡分布図 (1:20,000)

第2章 調査の経緯

第1節 調査の契機と経過

村道4号線は南北に村内を通る国道153号線の塩ノ井区から村内の西方に位置する大泉区へ通じる東西方向に延びる道路で、国道から河岸段丘の最上段に至る間は入沢川に沿って道路が設置されている。

この入沢川の両岸にはいくつかの遺跡が確認されているが、なかでも昭和42年に発掘調査が実施された天伯遺跡からは縄文時代中期・古墳時代後期・平安時代の集落が高い密度で検出され、入沢川周辺の河岸段丘上には広い範囲にわたり遺跡がひろがっていることが予想されていた。

平成13年度、村で村道4号線の拡幅工事が実施される事になり、村建設課より教育委員会へ拡幅予定地の遺跡の有無の照会があった。

これを受けた教育委員会は、拡幅予定地は未周知の場所であったが周辺に遺構密度の高い天伯遺跡をはじめとするいくつかの遺跡が点在していることや、予定地付近において過去に遺物の採集があったとの地域住民からの話があったことから、道路拡幅予定範囲の試掘調査を実施することとした。

これに先駆け、工事が実施される予定地東側に位置する水田の土地所有者により拡幅範囲内で耕土の掘削が深さ30cm前後行われており、ここから試掘調査に入る前の現地調査により石皿1点を採集した。

試掘調査は拡幅予定範囲が東から西へ向かい狭くなる形となっていたので、調査が可能な拡幅予定地の東から水田5枚にわたる約288㎡の範囲を調査区とした。

試掘調査を実施したところ住居址3軒が確認できたことから、引き続き本調査に入った。調査にあたっては未周知の遺跡であったので、調査地の地名から遺跡名を塩ノ井山ノ神遺跡とした。また、調査をすすめるにあたり調査区に平面直角座標第Ⅱ系（ $X=0.000$, $Y=0.000$ ）の原点を基準に2m×2mのグリットを設定し、グリットの東西列をA～Yのアルファベット、南北列を算用数字とした。

調査は試掘調査を平成13年11月16日より開始し、遺構の位置を確認したのち平成13年12月26日まで調査を行った。

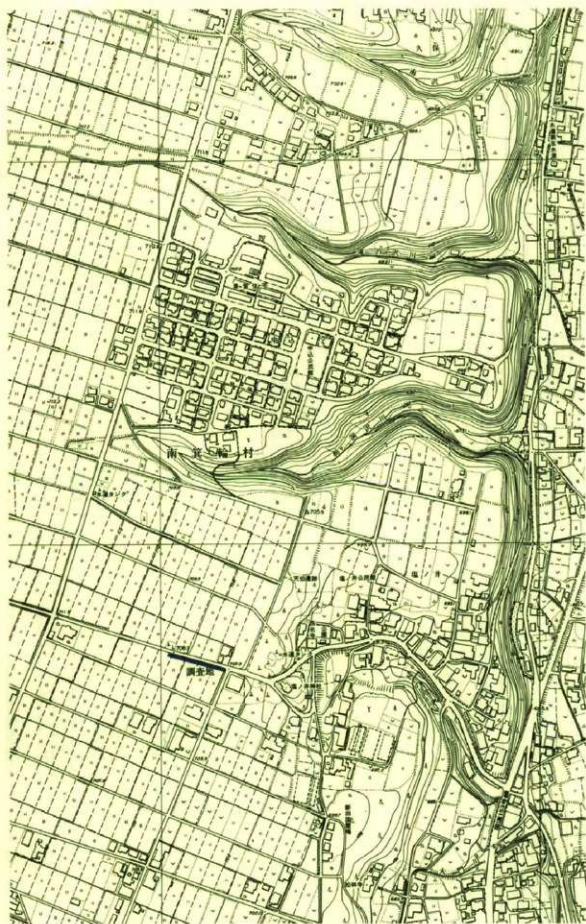
○調査日誌

11月

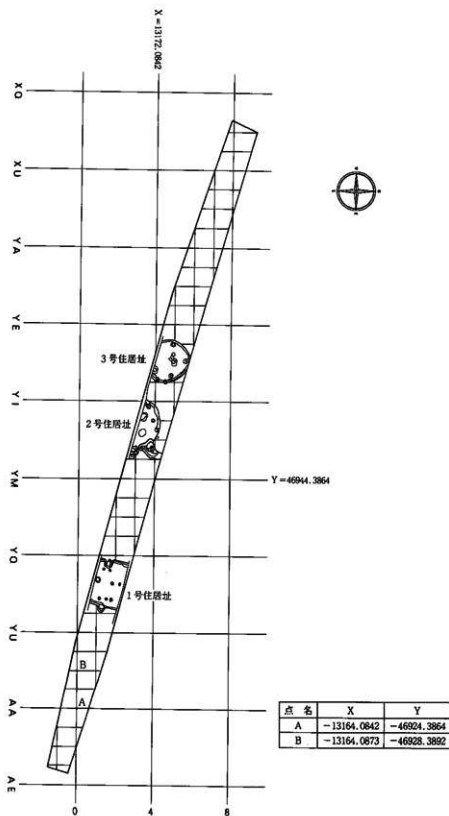
- | | | | |
|--------|--|-----|---|
| 11月16日 | トレンチを設置する。 | する。 | |
| 19日 | トレンチの掘削及び上面確認を行う。2軒の住居址を確認。1号・2号住居址とする。 | 26日 | 2号住居址と並行して3号住居址の検出に入る。ピット5基と炉址を確認する。 |
| 20日 | 引き続き上面確認を行う。3軒目の住居址を確認。3号住居址とする。グリット3の西に設定したグリット4では地山まで農地基盤整備時の掘削により攪乱されていた痕跡がみられたため、調査範囲をグリット4より東側に定める。 | 27日 | 3号住居址の検出及び土層断面の記録を行う。調査区内にBMの設定をする。 |
| 21日 | 2号住居址の検出に入る。ピット6基を確認 | 28日 | 2号・3号住居址の各ピットの土層断面の記録をとる。1号住居址の検出を開始。 |
| | | 29日 | 1号住居址より土師器・須恵器の遺物が多量に出土。2号・3号住居址は引き続き検出をおこなう。 |

12月

- | | | | |
|-------|-----------------------------|----|----------------------|
| 12月3日 | 2号住居址の検出を完了。写真撮影、平面図の記録に入る。 | 4日 | 雨天のため作業中止。 |
| | | 5日 | 1号住居址は土層断面の記録、2号住居址は |



第4図 調査範囲図 (1:5,000)



第5图 遺構全体図 (1:400)

- 遺物の取り上げ、3号住居址は出土遺物の平面図をとる。
- 6日 雨天のため作業中止。
- 7日 2号住居址と重複している土坑の掘削開始。
3号住居址は遺物の取り上げと平面図の記録に入る。
- 10日 1号住居址、土層断面を記録。3号住居址の測量図化完了。
- 11日 2号住居址の測量図化を開始。
- 12日 2号住居址、平面図完了。1号住居址カマドの土層断面を記録。
- 13日 雨天のため作業中止。
- 14日 午前中、昨日溜まった雨水の処理後、吹雪となり作業中止。
- 17日 2号・3号住居址の写真撮影と1号住居址のカマドの検出及び出土遺物の図化を行う。
- 18日 1号住居址の出土遺物の図化及び一部遺物の取り上げを行う。
- 19日 昨日に引き続き1号住居址の出土遺物の図化及び遺物の取り上げを行う。午後、作業休み。
- 20日 1号住居址カマド周囲の出土遺物の図化と取り上げ及び住居址の測量図化を行う。
- 21日 降雪のため作業中止。
- 25日 降雪のため作業中止。
- 26日 1号住居址測量図化完了。カマドの精査と記録、調査地の全体測量、片づけを行って調査を全て終了する。

第2節 調査の体制

○発掘調査

- 調査担当者 友松 諭 (南箕輪村教育委員会 社会教育係 学芸員)
- 調査作業員 小沢よね子 松澤英太郎 松澤 美和 (五十音順)
- 事務局 伊藤 修 (南箕輪村教育委員会教育長)
- 堀 正 (南箕輪村教育委員会教育次長)
- 山崎 文直 (南箕輪村教育委員会社会教育係長) ~H14. 3
- 有賀 仁志 (南箕輪村教育委員会公民館主事) ~H14. 3
- 宮下 裕司 (南箕輪村教育委員会社会教育係)

○整理作業

- 整理担当者 友松 諭
- 整理作業員 飯塚美喜子 小沢よね子 (五十音順)
- 事務局 伊藤 修 (南箕輪村教育委員会教育長)
- 堀 正 (南箕輪村教育委員会教育次長)
- 田中 聡 (南箕輪村教育委員会社会教育係長) H14. 4~



第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の住居址

2号住居址

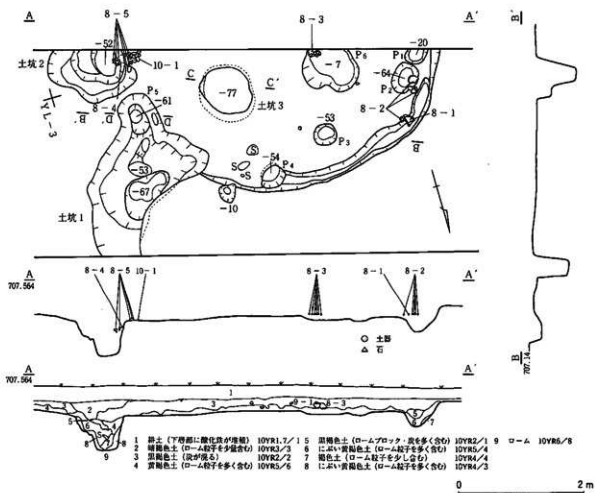
1号住居址より約11m西側のYL-3付近で検出した。住居址のプランは住居の大部分が南側の調査区外にはいつているため判然としなが、楕円形を呈していると思われる。

壁残高は22cm～0cmである。壁の掘方は全体的にゆるやかな傾斜を呈しているが、北東部分で土坑1と重複しており、壁の立ち上がりは不明瞭だった。また東側においても壁の立ち上がりをとらえることができなかった。周溝は北側の壁の周辺にめぐらされ、深さは16cm～9cmとなっている。

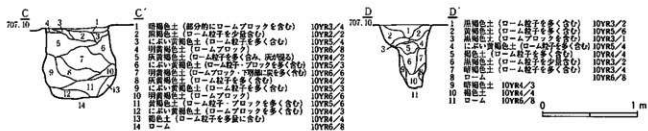
床面はローム層まで掘り込まれ硬く叩き締められているが、検出した範囲では一部を除き攪乱により床面はほとんど破壊されている状態だった。

ピットは6基検出した。主柱穴はP2・P3・P5と思われる。これらの深さは64cm～53cmと安定している。P4は掘方が斜めになっており、袋状となっている。

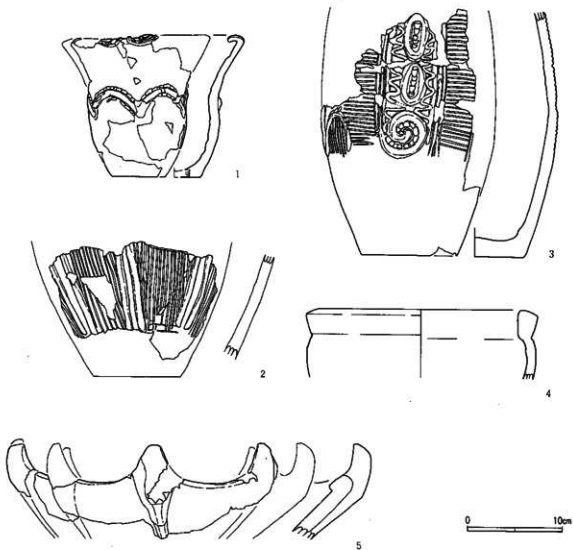
また、住居址東側に土坑2、その西側の住居址中央部よりのところに土坑3がみられた。土坑2は不整円



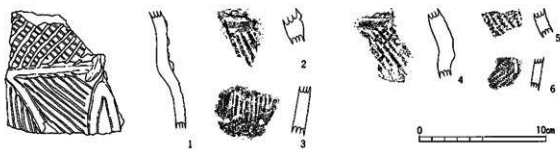
第6図 2号住居址実測図(1)



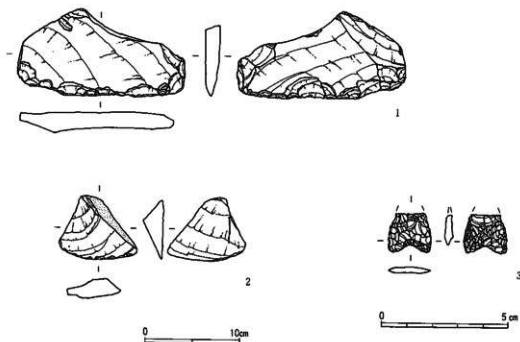
第7図 2号住居址実測図(2)



第8図 2号住居址出土土器実測図



第9図 2号住居址出土土器実測図・拓影図



第10図 2号住居址出土石器実測図

形を呈し、東側から階段状に掘り込まれ底面は平坦になっている。この土坑2と接する住居址東側床面には長さが9cm～10cm程の小石が貼床に埋め込まれるような状態でみられた。土坑2の覆土上層からは土器破片が出土している。土坑3は長軸88cm、短軸70cmの不整形円形を呈しており、断面形が袋状で底面は平坦になっている。この土坑3は覆土の一部に貼床が認められたことから掘削後、人為的に埋め戻されたことが考えられる。この土坑3からは遺物の出土はみられなかった。炉址は調査区内の検出範囲にはみられなかった。遺物は覆土及び床面直上より深鉢型土器（図8-1～図8-5）、横刃型石器（図10-1・2）、ピット2の覆土中より石鏃（図10-3）が出土している。

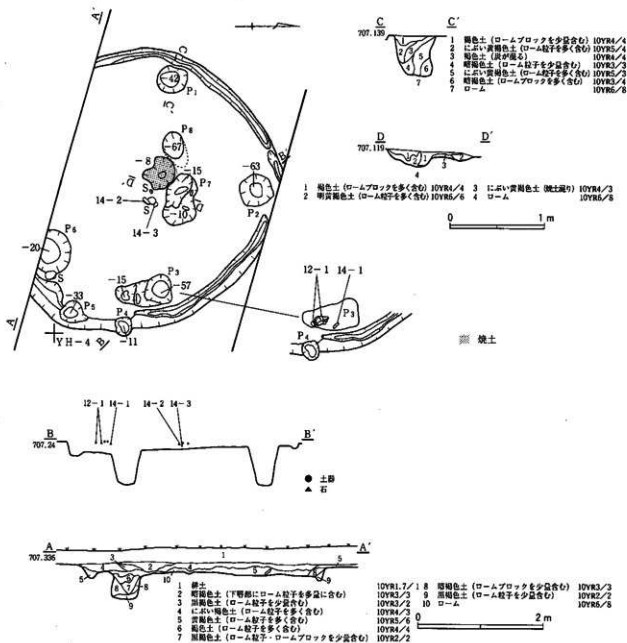
本址の時期は遺物から縄文時代中期中葉末であると思われる。

3号住居址

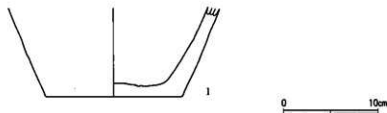
2号住居址の西側に隣接した位置、YH-4付近より検出した。住居址のプランは住居の3分の1程度が南側の調査区外にはいっているため判然としないが、楕円形を呈しているものと思われる。主軸はN-73°-Wを示すと思われる。

壁残高は12cm～6cmである。壁の掘方は全体的にゆるやかな傾斜を呈しているが北西部分がほぼ垂直になっている。壁残高はあまりなかったものの検出した範囲では全体にわたって壁の立ち上がりをとらえることができた。周溝は壁の周辺にめぐられ、深さは13cm～4cmである。床面はローム層まで掘り込まれ叩き締められているが、検出した範囲では東壁付近の一部を除き攪乱により床面はほとんど破壊され、凹凸が著しい状態だった。

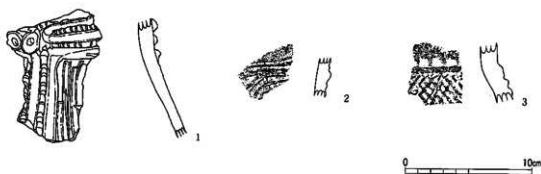
ピットは8基検出した。このうち主柱穴はP1・P2・P3と思われる。P8は斜めに掘り込まれ断面が袋状と



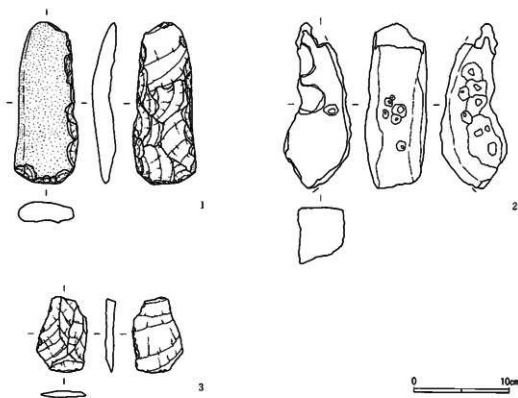
第11図 3号住居址実測図



第12図 3号住居址出土土器実測図



第13図 3号住居址出土土器実測図・拓影図



第14図 3号住居址出土石器実測図

なっている。

炉址はP₁とP₃のほぼ中央に位置している。炉址の種類は地床炉で長軸51cm、短軸39cmの不整円形の掘り込みになっており、深さは8cmと浅い。炉底は赤変し硬化している。炉址東側で4つの石が床面直上より出土したが、これらの石には被熱の跡は認められなかった。

遺物は少なく、住居址東側より深鉢型土器(図12-1)1点、打製石斧(図14-1)、炉址付近より石匙(図14-3)、石皿(図14-2)がそれぞれ1点出土しているほか、表面採集により覆土上層より石皿(図版12-5)がみられた。本址の時期は遺物から縄文時代中期中葉末であると思われる。

第2節 平安時代の住居址

1号住居址

調査地の東側、YT-1付近で検出した。住居のプランは住居址の南北壁が調査区外に入っているため不明であるが、長軸は5m程と思われる。壁残高は東壁で24~39cm、西壁で26~29cmである。主軸はN-81°-Wを示すと思われる。東壁には住居の出入口施設とみられる長さ約80cm、幅約80cmの掘り込みがみられた。土層観察から他の遺構の重複とは認められず、この住居址に伴うものと判断した。

この部分の掘方は中間に1段を設ける階段状となっている。1段目は東から住居址内に向かって緩やかな傾斜になっており、2段目にあたる底部の段は直接床面に接地しておらず、床面より僅かに低くなっている。階段状の底面の締りは全体的に軟弱だった。周溝は西壁と東壁の入口施設南側にみられる。深さは西壁部分で10cm~5cm、東壁部分で5cm~2cmである。

床面はローム層まで掘り込まれ叩き締められているが、住居址東側とカマド周辺の一部を除くと全体的に締りは軟弱である。特に住居址北東部分は掘り込んだローム層にかなりの凹凸がみられ、はっきりと床面をとらえることができなかった。また、東壁付近の床面には灰褐色粘土混じりの焼土、住居址北側の床面には灰褐色粘土がみられた。

ピットは8基検出した。遺構全てを検出していないので判然としにくい検出したピットから判断すると、主柱穴はP₄と思われる。また、カマド東側のP₁・P₂、入口施設と思われる掘り込み部分西のP₆・P₇がみられるが、これらの深さは12cm~22cmと浅いもののカマドと入口施設と思われる部分を結ぶ線を中心に対称に配置されピットの間隔がほぼ均等であることから、これらは支柱であると思われる。

このことからこの住居は主柱を南北中央軸に配し、東西軸に支柱をもつ2本柱の構造であることが考えられるが、住居内の壁の四隅に主柱穴がある可能性を残す。

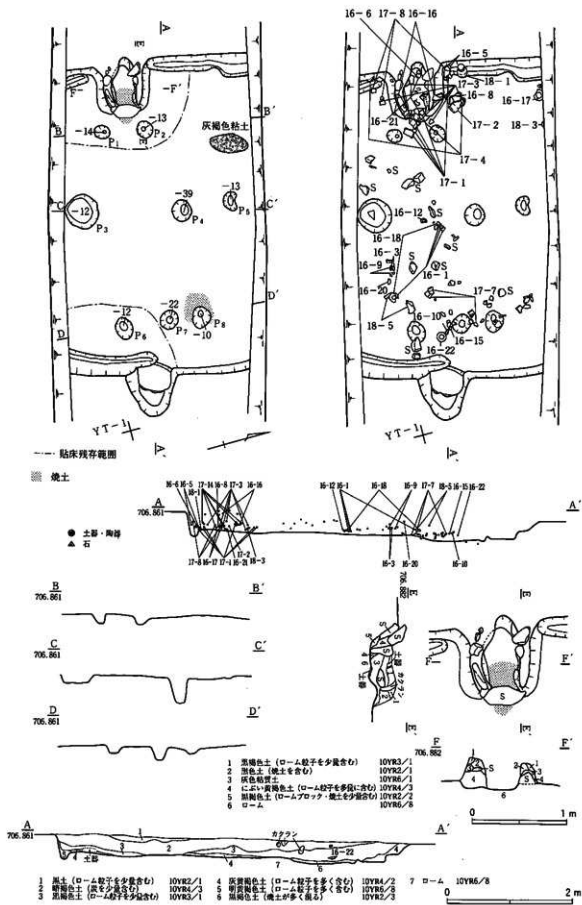
P₃・P₅についても位置的にみて本址に関連するものであると思われるが、P₁・P₂・P₄・P₆・P₇と同時期のものなのか新旧関係があるのかは、はっきりしなかった。

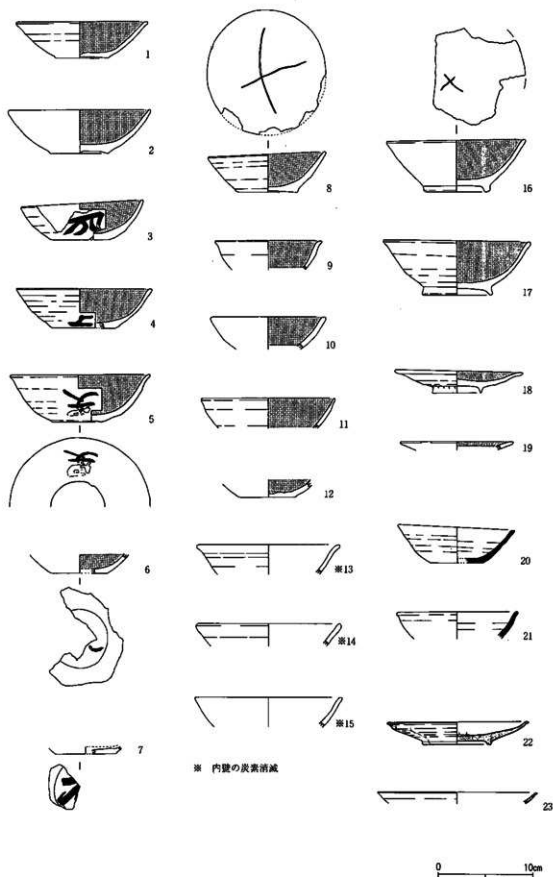
カマドは西壁に構築されており、灰褐色粘質土と転石による石芯粘土カマドである。壁をわずかに掘り込み構築されている。カマドの焚口には長さ45cm、幅22cmの扁平な安山岩を敷石に据えている。また、袖全体に芯として石組がされているが、これらの石は扁平な砂岩を縦長に据えており、壁から焚口にかけて徐々に小さなものを並べている。カマド床面に焼土がみられたが、あまり広範囲には広がっていない。袖部においても火焼の影響は僅かだったが、底部の燃焼部分は赤変硬化していた。

また、カマドの底部は凹凸があるものの燃焼部から壁にかけて緩やかな傾斜がつけられていた。

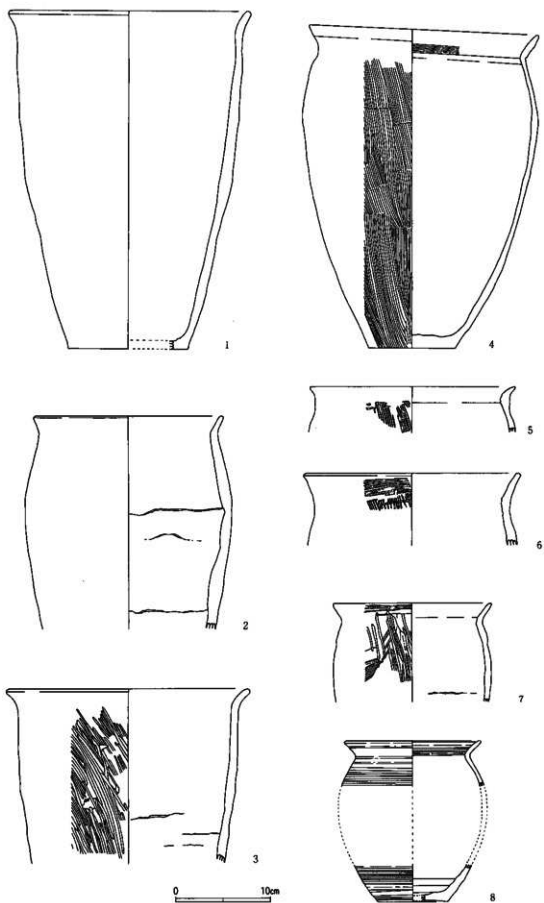
遺物はカマド付近と住居東側に集中して多くみられ、黒色土器（内黒）埴15点（図16-1~図16-15）、埴2点（図16-16・17）、皿2点（図16-18・19）、長胴壺6点（図17-1~図17-6）、小型壺2点（図17-7・8）、須恵器埴2点（図16-20・21）、長頸壺2点（図18-1・2）、短頸壺1点（図18-3）、壺2点（図18-4・5）、灰釉陶器埴1点（図16-23）、皿1点（図16-22）が出土しているほか、覆土中より砥石1点（図18-6）と鉄製品1点（図18-7）、鉄滓3点（図版16-8）がそれぞれ出土している。

本址の時期は遺物から平安時代前期、9世紀中葉であると思われる。

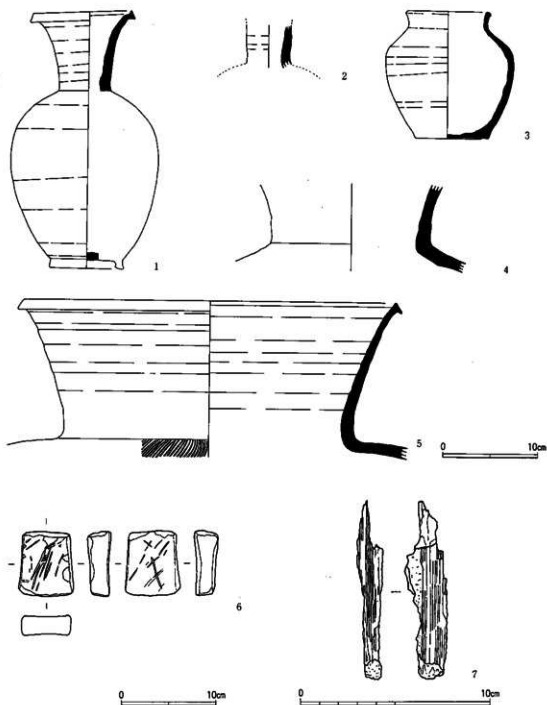




第16図 1号住居址出土遺物実測図(1)



第17図 1号住居址出土遺物実測図(2)



第18図 1号住居址出土遺物実測図(3)

第3節 その他の遺構

土坑1

2号住居址の北東側部分と重複している。プランは北側の一部が調査区外に入っているが、不整形を呈している。掘方は東側から西側へ斜めに掘り込まれ、底面は凹凸がみられた。また、西側は袋状となっている。

覆土中からの遺物の出土はなかった。時期は判然としないが、2号住居址P5の土層断面の観察から2号住居廃絶以後のものと思われる。

第4章 総 括

今回の調査では縄文時代中期中葉末の住居址2軒と平安時代前期の住居址1軒を検出した。以下、調査結果について成果と課題をあげ、簡単であるがまとめとしたい。

成果としてまずあげられるのは平安時代前期の住居址である。住居址全体の検出はではなかったものの、この住居址からは良好な状態で食器・煮炊具・貯蔵具が出土した。この住居にみられた食器類は黒色土器が主体となっていたが、これまでの村内の調査事例と比較すると黒色土器が食器の主流を占める時期のものとしては、内容・数ともに最も充実したものになった。また、1軒の住居から出土した墨書・刻書土器の量もこれまでの村内の調査事例のなかでは最多のものであり、出土した食器全体に対し墨書・刻書のみられる土器の占める割合が約30%となっており、この住居の性格を示唆するものと思われる。

住居のつくりについても出入口施設と思われるものの検出や、笑口に敷石を据えたカマド、住居の主軸方向に支柱を置き、それに直交する中央軸に主柱を据える2本主柱建ちの構造が想定されるものであることなど、これらもこれまでの村内の調査事例にはみられなかったものであり、遺物・遺構ともに新たな資料の追加をみたことの意義は大きいと考える。

この住居址の帰属時期は遺物から9世紀中葉のものと思われるが、出土した墨書・刻書土器の量や猿投窯の黒埴14号窯式の灰軸陶器が出土している他、砥石が出土していることから鉄製利器の存在がうかがえられ、集落の中核的な住居であったことが想定される。

この時期の集落は既に集落内に中核的な役割をもつと考えられる大型住居とそれに付随する中・小型住居、掘立柱建物で構成される形態がみられるようになっているが、今回検出した住居址は長軸が5m程と規模的には中型の部類に入る。集落全体の規模と中核的役割をもつ住居の規模が比例する等のことが考えられるが、今回の調査は広範囲にわたるものでなく検出住居址が1軒のため同遺跡内にある同時期の住居址と比較することができず、現時点では資料不足でありこの住居址の性格についての結論は今後の資料の増加を待って検討しなければならない。

また、墨書土器についても今のところ出土事例が僅かであるため使用されている文字に共通性は見出せず検討を加えるまでには至っていないが、これについても今後課題として取組んでいく必要がある。

縄文時代の遺構としては縄文時代中期中葉末の住居址2軒を検出したが、双方ともに撓乱の影響を著しく受けていたため保存状態は良好ではなかった。しかし、河岸段丘の最上段まで集落が広がっていることが明らかとなったことで、同遺跡の位置する入沢川と栃ノ沢川に挟まれた舌状台地とその周辺は広範囲にわたる集落となっていたことが想定できるようになった。

特に同遺跡の東に隣接する天伯遺跡は昭和42年に調査が行われているが、トレンチ掘りを主体とした調査であるにもかかわらず、出土した縄文土器の量は久保上ノ平遺跡より僅かに少ない程度で、極めて高い密度で遺構のあることが想定される。これまで天伯遺跡に隣接した地域では同時期の集落は認められなかったが今回の調査によりこの一帯には天伯を中心に複数期にわたる大規模な集落群が埋蔵されていることがうかがえる。

今後、この地域を含め村内の遺跡分布と範囲の精査を改めて行い、保存対策をさらにおしすすめることが大きな課題になると思われる。

なお、最後になったが冬季の厳しい環境のなかで作業にあたって頂いた作業員の方々、本書の作成にあた

り多大なご尽力を頂いた関係諸機関にお礼を申し上げるとともに、ご指導、ご協力を頂いた先輩諸氏に改めて感謝し、ご教示を頂きながらそれを生かしきれなかったことをお詫びしたい。

第2表 1号住居址出土土器一覧

大 別	種 類	器 種	数 量	%	墨書・刻書の有無
食 器 類 (23点)	黒色土器 (内黒)	坏	15	65.2	墨書 5点「上」・「田八文」か？ 不明 (3) 刻書 1点「×」
		碗	2	8.7	刻書 1点「×」
		皿	2	8.7	無
	須恵器	坏	2	8.7	＊
		碗	1	4.35	＊
		皿	1	4.35	＊
煮 炊 具 (8点)	土 師 器	長 胴 甕	6	75.0	
		小 型 甕	2	25.0	
貯 蔵 具 (5点)	須 恵 器	長 頸 壺	2	40.0	
		短 頸 壺	1	20.0	
		甕	2	40.0	

【食 器】

0		100
坏 74%	碗 13%	皿 13%

【煮炊具】

0		100
長胴甕 75%	小型甕 25%	

【貯蔵具】

0		100
長頸壺 40%	短頸壺 20%	甕 40%

第19図 1号住居址出土土器器種別構成図

第3表 出土土器観察表 No1

辺長	図版No	器形	法 量 (cm)			調 整		胎 土	焼 成	色 調		残部	出土位置	備 考
			口径	底径	高さ	外面	内面			外 面	内 面			
2号位	8-1	深鉢	12.0	5.5	14.8	ナデ	ナデ	砂粒多い	普通	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 6/3	2/5	床面直上	粗灰土器。胴部の文様帯5単位。内壁に炭化物が付着。
	8-2	*	—	9.0	—	*	*	精 良	良好	橙 色 7.5YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 7/4	1/5	*	縦方向の2本1組の漆帯文が器面を分析しその間を縦方向の沈線で充填している。
	8-3	*	—	10.1	—	*	*	精 良 (砂粒少量含)	普通	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 6/3	1/2	*	内壁に炭化物が付着しているほか、胴帯がみられる。底面に穴が附まれているが穿孔はしていない。
	8-4	*	21.1	—	—	ミガキ	ミガキ	精良緻密	良好	明赤褐色 2.5YR 5/6	橙 色 2.5YR 6/6	1/25	床面	残部は無文。表面は赤みを帯びている。
	8-5	*	30.3	—	—	ナデ	ナデ	精良緻密	*	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 6/3	1/5	床面 土境2層土	口縁部の突起8単位。内外面ともに丁寧なナデ調整。
3号位	12-1	深鉢	—	14.3	—	ナデ	ナデ	砂粒多い	普通	橙 色 2.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 4/2	*	床面直上	内部底面が割落が目立つ。
1号位	16-1	坏 (土)	14.0	5.1	3.85	ロクロナデ ヘタリガキ	ロクロナデ ヘタリガキ	精 良	良好	灰黄褐色 10YR 5/2	黒 色 10YR 2/1	7/10	床面直上	内面。器全体に歪みがみられる。内面に割落部分あり。底部は回転糸切りで周辺部を回転糸切り調整。
	16-2	*	15.2	6.1	4.5	*	*	*	普通	橙 色 10YR 7/4	暗灰色 10YR 4/1	2/5	墓土中	内面。内面のミガキ調整が稀で、内面の炭素がほとんど剥落している。底部へラ切り+ナデ調整。
	16-3	*	12.7	5.8	3.75	*	*	精 良 (砂粒少量含)	良好	橙 色 7.5YR 6/6	黒 色 7.5YR 1.7/1	9/10	床面直上	内面。器面に黒色あり。割裂不能。底部は回転糸切り+周辺部を回転糸切り調整。
	16-4	*	14.5	7.5	4.1	*	*	精 良	*	にぶい黄褐色 10YR 7/4	黒 色 10YR 2/1	2/5	墓土中	内面。器面に「上」の磨痕。底部は回転糸切りで周辺部未調整。
	16-5	*	14.3	5.1	4.9	*	*	精良 (小石少量含)	*	橙 色 7.5YR 6/6	黒 色 7.5YR 2/1	ほぼ 完形	床面	内面。器面に黒色あり。「田八丈」か？内面は使用による磨痕が著しい。底部は回転糸切りで、周辺部未調整。
	16-6	*	—	5.92	—	*	*	精 良	*	にぶい褐色 7.5YR 6/3	黒褐色 10YR 3/1	1/4	カマド底部 ・墓土中	内面。底部に黒色あり。割裂不能。底部は回転糸切りで周辺部を回転糸切り調整。
	16-7	*	—	6.45	—	*	不明	*	*	橙 色 7.5YR 6/6	—	1/20	墓土中	底部に黒色あり。割裂不能。底部は回転糸切りで周辺部未調整。
	16-8	*	12.2	6.1	3.95	*	ロクロナデ ヘタリガキ	精 良 (砂粒少量含)	*	にぶい褐色 7.5YR 6/4	黒 色 7.5YR 2/1	ほぼ 完形	床面直上	内面。器全体に歪みがみられる。内面に割落で「X」がみられる。カマジルシか？底部は回転糸切りで周辺部未調整。
	16-9	*	11.4	—	—	*	*	精良緻密	*	にぶい褐色 5YR 6/4	黒 色 7.5YR 1.7/1	1/20	*	内面。口縁部が強く外反する。
	16-10	*	12.2	—	—	*	*	精 良 (小石少量含)	*	にぶい褐色 7.5YR 6/4	黒 色 7.5YR 1.7/1	3/10	*	内面。袖と比べ器面に厚みがある。
	16-11	*	14.2	—	—	*	*	精良緻密	*	橙 色 5YR 6/6	黒 色 7.5YR 1.7/1	1/20	墓土中	内面。内面の一部は剥落している。
	16-12	*	—	5.8	—	*	*	精 良 (砂粒少量含)	*	にぶい褐色 7.5YR 6/4	黒 色 7.5YR 1.7/1	2/5	床面直上 ・墓土中	内面。内面の3分の2が剥落。底部は回転糸切りで周辺部未調整。

No. 2

1号住

第3表 出土土器観察表 No.3

遺構	図版No	器形	法 量 (cm)			調 整		胎 土	焼 成	色 調		重量	出土位置	備 考
			口徑	底徑	器高	外 面	内 面			外 面	内 面			
1号住	17-3	灰銅型	25.1	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	精良	良好	にぶい黄褐色 10YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 7/4	2/5	カマド	
	17-4	*	24.2	9.2	33.5	ヘラナデ ハナ調型	*	精良緻密	*	灰褐色 10YR 5/1	にぶい黄褐色 10YR 6/3	3/5	カマド 覆土中	全体的に歪みが少なく、他のものより器壁が厚い。外側にハケのカキ目が見られる。
	17-5	*	21.3	—	—	*	*	精良	*	にぶい黄褐色 10YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 6/3	1/50	床面直上 覆土中	口縁を強く外反させようとしたと思われるが、作りが堅いため、外反が弱く見える。
	17-6	*	22.1	—	—	*	*	精良 (砂粒多く含む)	*	にぶい黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 5/2	1/50	*	外側にハケのカキ目が見られる。
	17-7	小壺型 (土)	16.6	—	—	*	*	*	*	灰褐色 7.5YR 5/2	にぶい黄褐色 10YR 6/4	3/10	*	外面は発粒にハケ調整し、その後、細なヘラナデを加えている。
	17-8	*	14.0	7.2	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	精良緻密	*	にぶい褐色 7.5YR 6/4	灰褐色 7.5YR 4/2	2/5	カマド・ 床面直上 覆土中	内外面にカキ目が見られる。底部には回転糸切り痕が残る。
	18-1	長頸壺 (須)	10.4	7.8	26.9	*	*	小石多く含む	不良	緑灰色 7.5GY 6/1	緑灰色 7.5GY 6/1	1/12 完形	床面	ヒビ割れがあるもほぼ完形。底部に糸切り痕を残す。
	18-2	*	—	—	—	*	*	精良緻密	*	灰 色 7.5Y 6/1	灰 色 7.5Y 6/1	1/30	床面直上	自然釉が剥がれている。
	18-3	短頸壺 (須)	9.0	7.6	13.2	*	*	精良 (小石少量含む)	*	灰 色 7.5Y 7/1	灰 色 7.5Y 7/1	7/10	床面	底部は無台でヘラ切り。一部に自然釉が剥かる。
	18-4	壺 (須)	—	—	—	ヘラナデ タタキ	ヘラナデ タタキ	精良緻密	良好	青灰色 5BG 5/1	青灰色 5BG 5/1	1/30	床面直上	
	18-5	壺	39.1	—	—	ナデ ヘラナデ タタキ	ナデ タタキ	精良緻密	*	緑黒色 10GY 2/1	緑灰色 10GY 6/1	1/30	床面直上 覆土中	胴部の内外面にタタキ目が見える。また、一部に自然釉が剥かる。又、同一個体と思われる破片が見られる(図版16-2~4)

第4表 出土石器観察表

遺構	図版No	分 類	石 質	法 量 (cm)			重 量 (g)	出土位置	備 考
				長さ	幅	厚さ			
2号住	10-1	横刃型石器	砂質ホルンフェルス	6.8	13.4	1.2	152	床面	
	10-2	*	砂岩	5.0	6.3	1.6	40	覆土中	
	10-3	石鏃	黒曜石	(1.55)	1.75	0.35	1	P ₂ 覆土中	先端部欠損
3号住	14-1	打製石斧	砂岩	12.7	5.05	1.3	145	床面直上	
	14-2	凹石	安山岩	(13.0)	5.35	4.8	346	*	大部分が欠損。両面に磨痕、敲打痕が残るほか、側面にも敲打痕がある。
	14-3	粗製刃器	砂岩	5.95	4.05	0.6	14	*	
1号住	18-6	礫石	凝灰岩	5.2	4.4	2.0	54	覆土中	4面ともに磨耗痕あり。

第5表 出土鉄製品観察表

遺構	図版No	分 類	法 量 (cm)			重 量 (g)	出土位置	備 考
			長さ	幅	厚さ			
1号住	18-7	鉄片	9.3	2.25	1.4	12	覆土中	薄い板状のものが重なりあっている。

図 版



1. 調査地
遠景



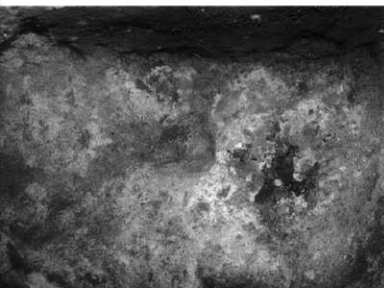
2. 調査地
近景



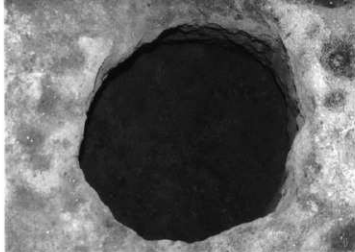
1. 2号住居址
土坑1 全景



2. 2号住居址
土坑2 全景



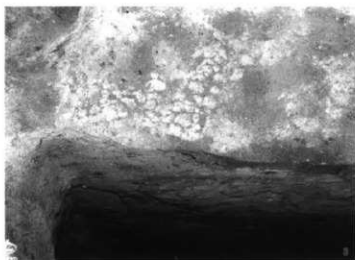
3. 2号住居址
土坑2 底面状况



1. 2号住居址 土坑3 全景



2. 2号住居址 土坑3 土層断面



3. 2号住居址 土坑3 覆土上面贴床



4. 2号住居址 P₃土层断面



5. 2号住居址遺物出土狀況



1. 3号住居址
全景



2. 2号住居址・3号住居址





1~2

3号住居址
土層



3~4

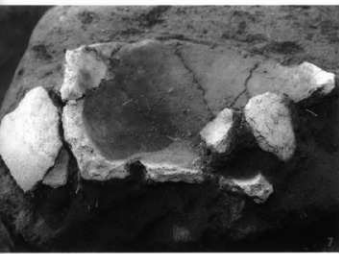
3号住居址
和址



5. 3号住居址
P₁土層

6~8

3号住居址
遺物出土狀況



1. 1号住居址
遺物出土状況



図版 7

2. 1号住居址
全景





1. 1号住居址出入口部分土層断面（南方より）



2. 1号住居址東側（西方より）



3. カマド掘削状況（上方より）



4. カマド土層断面（南方より）



5. 1号住居址カマド
遺物出土状況



1. 1号住居址 カマド全景1 (東方より)



2. 1号住居址 カマド全景2 (北東より)



3. 1号住居址 カマドたち割り状況



4. 1号住居址 カマド石組状況1 (東方より)



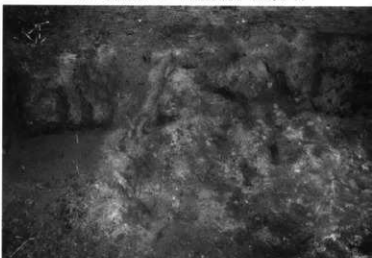
5. 1号住居址 カマド石組状況2 (南方より)



6. 1号住居址 カマド石組状況3 (上方より)



7. 1号住居址 カマド石組状況4 (北東より)



8. 1号住居址 カマド掘方状況 (東方より)



1~8 1号住居址 遺物出土状況





8-1

1



8-2

2



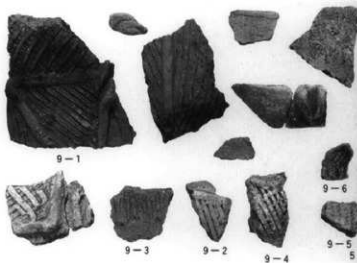
8-3

3



8-4

4



9-1

9-3

9-2

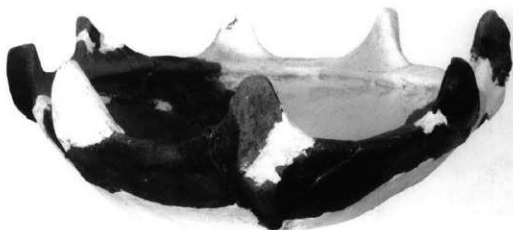
9-4

9-6

9-5

5

1~6 2号住居址
出土遺物

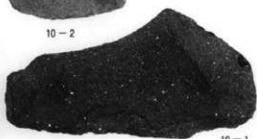


8-5

6



10-2



10-1



10-3

1-2

2号住居址出土遺物



12-1



13-1



13-2



13-3



4



5



14-1



14-3

6



14-2



7



3-7 3号住居址 出土遺物



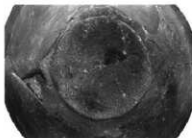
16-1

1



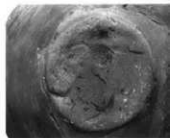
16-2

2



16-3

3



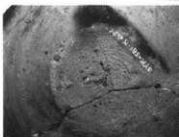
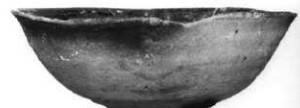
16-4

4



16-5

5



16-17

7



16-8

6



1~7 1号住居址 出土遺物1



16-18

2



16-16



16-22

3



16-20

4



5



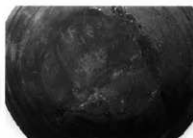
16-6

6



16-12

7



16-9



16-13



16-14



16-11



16-15



16-10



16-21



16-23

9

1~9 1号住居址 出土遺物2



17-4

1



17-1

2



17-2

3



17-3

4



17-7

6



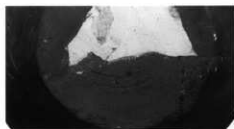
17-8

7



5

1~10 1号住居址 出土遺物3



17-5

17-6

8



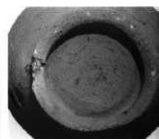
18-1

9



18-3

10



9底部



10底部



18-5

1



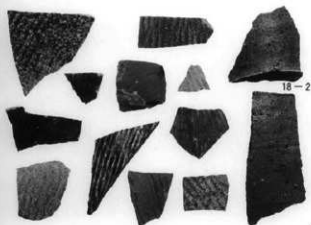
2



3



4



18-2

5



18-4

6



18-7

7



8



18-6



9

1~9 1号住居址 出土遺物4

引用参考文献

- | | |
|-------------------|--|
| 長野県教育委員会 | 1972 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那郡南箕輪村その1・その2』 |
| 社団法人 中部建設協会 | 1985 『天竜川上流地質図』 |
| 長野県史刊行会 | 1981 『長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺構・遺物』 |
| 財団法人 長野県埋蔵文化財センター | 1990 『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書4 一松本市内その1— 総論編』 |
| 南箕輪村誌編纂委員会 | 1990 『南箕輪村誌 上巻 自然編・遺跡編・信仰生活編』
『南箕輪村誌 下巻 歴史編』 |
| 南箕輪村教育委員会 | 1967 『天伯遺跡緊急発掘調査概報』
1969 『神子柴遺跡緊急発掘調査報告書(第3次発掘調査)』
1973 『高根遺跡』
1975 『大芝東遺跡』
1992 『北垣外遺跡 宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
1993 『箕輪遺跡 上伊那郡南箕輪村塩ノ井中田地区』
1994 『宮ノ上墳墓 宮ノ上遺跡発掘調査報告書』
1997 『久保上ノ平遺跡 墓地公園及び宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 |

報告書抄録

ふりがな	しおのいやまのかみいせき							
書名	塩ノ井山ノ神遺跡							
副書名	村道4号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	南箕輪村埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	友松 諭							
編集機関	南箕輪村教育委員会							
所在地	〒399-4592 長野県上伊那郡南箕輪村4840番地1 TEL (0265) 76-7007							
発行年月日	2003年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
塩ノ井山ノ神遺跡	長野県上伊那郡南箕輪村683-2 他	20385	50	35° 52′ 49″	137° 58′ 48″	20011119 / 20011226	288㎡	村道4号線拡幅工事に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
塩ノ井山ノ神	集落址	縄文 平安	縄文中期住居址 2 平安前期住居址 1		縄文土器 深鉢 石器 石斧・石鏃 須恵器 長頸壺 短頸壺 埴 土師器 長頸甕 小型甕 黒色土器 埴 埴 灰釉陶器 甕 砥石・鉄滓・鉄片		平安時代前期（9世紀中葉）の住居址で食器・煮器具・貯蔵具類が良好な状態で出土。	

村道4号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

塩ノ井 山ノ神遺跡

平成15年3月26日 発行

編集 長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

発行 長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
